

1: 【The Black Note】第17話 終わりの始まり

3: ■オープニング

5: セレスモノローグ「ブラックノート、黒い背表紙……漆黒の装丁の闇の歴史書。12の精霊核の  
6: 伝説を時の果てまで追いかけた黒髪の歴史家がひっそりとまとめ上げたものだという。ど  
7: こにあるのか永遠の謎とされてきた真相がついに解き明かされ、闇に消された真実の歴史  
8: があたしたちの目の前に姿を現そうとしていた」

10: ■タイトルコール

11: デュレ「The Black Note 第17話 終わりの始まり」

13: ■本編

14: ラール「首を刎るのはまた今度にして貰いたいね。むしろ、今をどうするのかな？」

15: ルーン「どうするたって、どうしようもないわよね」

16: ラール「はあ、冷たいよね、実際。一つくらい例外をつくってあげてもいいんじゃない？ 別に  
17: ぼくたちの名誉が傷つくのでもないし。どう？」

18: ルーン「どうって、あんたにはクロニアスとしてのプライドはないの？」

19: ラール「今更、プライドも何もないよ。それにその娘の存在価値がかかってるなら尚更じゃない？

20: ぼくたちのプライドよりもその娘の将来をとってあげたほうがいいと思うな。ぼくは」

21: ルーン「……」

22: ラール「ま、いくらボクらがクロニアスだからって、万人に公平だなんて、所詮、無理な話だから  
23: ね。デュレ、キミは帰りたいんだらう？」

24: デュレ「……はい」

25: ルーン「けど、もはや、まともに戻れる可能性はとても低いわよ。それでもやる？」

26: デュレ「それでも、わたしは……帰りたい……」

27: ルーン「……そう。じゃあ、覚悟してね。失敗してもわたしたちは責任はとらない」

28: デュレ「……それでも構いません。そうする以外に道は……」

29:

30: SE：落雷があって、木が燃える。

31:

32: レイア「あの、すみません、わたしたちはどうなるんですか？」

33: ルーン「あんたはどうにもならない。わたしたちのことなんか忘れて、シリアくんと一緒に暮ら  
34: したらいい。それ以上も、以下もないから」

35: ラール「で、どうする？ ルーン？ 約束の時は過ぎた。フツウの方法では帰せないよ。……マ  
36: リスの断末魔の魔力と魔に落ちかけたシメオンの残留魔力が干渉し合っていて、目的の時  
37: 代を見定めることが出来ない」

38: ルーン「――あれを……召喚するわよ」

39: ラール「やっぱり？」

40: ルーン「そおよ。“やっぱり”なのよ。それもこれもあんたのせいだからね」

41: ルーン・ラール「さあ、精霊核よ、あるじの前に姿を現せ」

42:

43: SE：しゅわわ～？

44: SE：きらきら

45:

46: ラール「初めてだね……。精霊以外のものがあるところで、呼び出したのは……」

47: ルーン「しよがないでしょう。異空間においたままじゃ、その娘を元の時代に送り返そうなん  
48: て無理な話なんだから」

49: デュレ「……紫色の精霊核。初めて……見ました」

50: ルーン「――わたしがいいと言うまで触らないで。いいこと？ 帰れる保証はどこにもない。失  
51: 敗したら、あんたは永遠に時の狭間を彷徨うことになるわ」

52: デュレ「ですが、あなた方は時を司る精霊で……」

53: ルーン「精霊であって、神ではない。全知全能だと勘違いされてもらっちゃ困るの」

54: ラール「まあ、今回さ。今まで一度も起きたことのないようなコトが起きちゃったんだ。……

55: “不死鳥の卵”と“万里眼”が融合したこと。一見、大したことないように思えるでしょ？

56: けど、それが切っ掛けになって、歴史は大きく二つに分離して、その卵はいつかともでも  
57: ないことをもたらすのさ」

58: デュレ「あ、あの、それは一体どういうコトでしょうか？」

59: ラール「まあ、君は何も知らなかったんだね。ありとあらゆる未来を見透かす万里眼を持った不  
60: 死鳥が生まれる。1516年に無事帰れたら、飼ってみたいわい。ああ、でも、まだ、彼女

61: は生まれていないんだ。時のゆりかごに揺られて時が来るのを待ち続けてる」

62: ルーン「それがあんたの未来とこの時代を切り離そうとしてるの」

63: シリア「そうさせないのがクロニアスの使命じゃないのか？」

64: ルーン「そうね。そうしたいところだけど、不可能だわ。基本的にわたしたちは傍観者に過ぎな  
65: いの。時の流れを調整することは出来ても、完全には制御することは出来ない。ドライア

66: ードが自身の森の成長を完全に掌握できないのと同じコトよ。互いに影響し合うことはあ  
67: っても、互いを完全に支配することは出来ない」

68: ラール「それに未来を見透かす不死鳥の卵の持つ魔力は強大だしね」

69: ルーン「あんたはもう黙っていなさい。あんたが口を開くたびに壊れていくような気がするわ」

70: ラール「それでもないと思うんだけどなあ」

71: ルーン「……。まともに関手してたら疲れるわ……（ため息）けど、まあ、デュレ……。あんた  
72: の思いを叶えるために力は貸してあげるわ。精霊核に触れなさい」

73: デュレ「……」

74:

75: ・空白……

76:

77: ルーン「触れてくれないと始まらないんだけど」

78: デュレ「あ……」

79:

80: SE：デュレ、精霊核に触れる。

81:

82: ルーン「始めるわよ。……大きく息を吸って。心を落ち着かせるの。――邪念は一つ残らず排除  
83: して、一旦、心を無にするの。それから、あんたの帰りたいところをイメージする。より

84: 鮮烈にイメージして。あんたの時代、あんたの大事なモノ。あんたとあんたの時代との接  
85: 点を心に思い描いて……。わたしたちの精霊核からあんたの面影を探し出す。上手くいけ

86: ばいいけどね」

87: ラール「上手くいくさ、絶対に」

88:

89:

90: □とあるシメオンの街角で。

91: ・久須那とサム

92:

10.03.23  
TBN17.rtf

93: サム「あ～不甲斐ねえ……」  
94: 久須那「時には引くことも肝要だ。突っかかっていくことだけがよいことではないだろう」  
95: サム「判ってるさ。判ってるけどよ……。後味が……悪い」  
96: 久須那「——わたしをとって来てありがとう」  
97: サム「——そう言ってくると、正直、助かる……」  
98: 久須那「サム、そう言えば、さっき、デュレから渡されたのは何だ？」  
99: サム「……あ？ 忘れてた」  
100:  
101: SE：ポケットごそごそ。  
102:  
103: 久須那「シンバサイズの闇護符のようだな。その片割れだ」  
104: サム「闇護符？ 何で、そんなものを渡してよこしたんだ、デュレは」  
105: 久須那「天下の魔法騎士団長さまとあろうお方が判らないのか？」  
106: サム「おいおい、こんな時にいじめないでくれよ。——説明してくれ」  
107: 久須那「シンバサイズは一種の“同期”魔法だ。デュレの持ってる半分とサムの持っている半分の  
108: 状況を同一にする魔法なんだ。無論、術者が“キャリアアウト”しなければそれもただの紙  
109: くずだけどな。例えば、……そ、だな。デュレが池の中にもどっぷり浸かったとするか？  
110: すると、その状況がもう半分を持っているお前のところにも再現される魔法だ」  
111: サム「つまり……、デュレが時越えに成功したら、俺も未来に引きずられるってことか……？」  
112: 久須那「恐らく。問題なのは時越えという非日常のことまで力が及ぶかだな？」  
113: サム「……そうだなあ。だが、今はそれにすぎるしかねえだろう？ もし、成功したらてめえと  
114: 会える。封印の絵の中でのめえは俺を待っていてくれるのかな……」  
115: 久須那「わたしはずっと待っている……」  
116:  
117: SE：護符が光り輝き、何かする音？  
118:  
119:  
120: ルーン「……見つけた。1516年の夏。あんたが出發した朝」  
121: デュレ「か、帰れるんですか？」  
122: ルーン「待つ。今、調整して——あんたたちが出發した直後に送り返す」  
123: ラール「誤差はプラスマイナス十二時間ってとこかな。場所はシメオンのこの辺」  
124: ルーン「戻れるなら、それで十分でしょ？ ……調整が済むまでもう少し時間があるわ。精霊核  
125: に触れたまま挨拶でもしてたら？」  
126: デュレ「あ……はい……。——さよなら、リボンちゃん。向こうで会うリボンちゃんはあなたじ  
127: ゃないんですね……」  
128: シリア「いいや。オレはオレさ。この世界がお前たちの世界から隔てられたモノになろうとも、  
129: あいつはここで起きたことをぎっと知ってる。そうだろ？ ルーン」  
130: ルーン「そうよ。残念だけど。だから、苦勞が絶えないの」  
131: ラール「しなくてもいい苦勞を背負い込んだのはルーンじゃないか」  
132: ルーン「人ごとだと思っ。言っておきますけどね、あんたもわたしと同じなのよ。そこんところ、  
133: よろしく。わたしの失敗はあんたの失敗！ オーケー？」  
134: ラール「ええ？ そんなのいいわけないよ」  
135: ルーン「いいよ。それで。あの卵が孵ったら、何もかも変わっていく。わたしたちの精霊核に  
136: 刻まれ“た”新しい歴史の萌芽がここに……」  
137: ラール「歴史的瞬間だね」  
138: ルーン「ステキな将来をと言ってあげたいけど、万里眼と不死鳥の卵が一つになったあれは危険

10.03.23  
TBN17.rtf

139: な存在だわ。肝に銘じなさい。少しでも間違ったら、あんたは身の破滅よ」  
140: デュレ「身の破滅……？」  
141: ルーン「身の破滅。あれが近くにあるだけで危険が及ぶのよ。覚悟して」  
142: ラール「ま、実際、天使の手から離れた天使のアイテムを維持するのは想像以上に難しいからね。  
143: しかも、それが一つになったやつだ」  
144: ルーン「準備完了よ。無駄話はいい加減にして。さあ、終わりを始めるわよ。両手を精霊核に」  
145: デュレ「……はい……」  
146: ルーン・ラール「いい？ 目を閉じて。精神をもう一度集中させて……」  
147: デュレ「はい」  
148: ルーン「次に目を開いた時、あんたはあんたの時代のシメオンに立っている」  
149:  
150: SE：時を越える音。  
151:  
152: ルーン「さよなら、デュレ。次に会うことがあったらこんなに優しくないから、そのつもりで」  
153: ラール「さてと……。ところで、ルーンは気がついてたかな？」  
154: ルーン「——サムのことでしょ。もちろんよ。……あんたの言葉を借りたら、一人も二人も同じ  
155: でしょ？ わたしが“いい”と言わない限りあの時代へは行けない。——いいよ。わたし  
156: は神じゃないけど、悪魔じゃないの」  
157: ラール「そうだったね。で、こちらはどうするんだい？」  
158: ルーン「頭痛の種がまだ残っていたわね」（ため息  
159: シリア「——オレたちは大丈夫だよ。オレたちは自分たちだけで歩いていけるよ。お前たちは自  
160: 分のすべきことをしなさい。——オレたちはお前たちが思うほど、弱くはない。だろ？  
161: レイア」  
162: レイア「そうですね。何だか、よく判らないですけど……？」  
163: ラール「……じゃ、ぼくたちの役目はここまでだ」  
164: ルーン「そのようね。では、リボンちゃん。こんな大甘な処置なんて二度としてあげないんだか  
165: らね。……クロニアスは基本的に慈悲なき精霊なの。甘ちゃんだなんて、噂なんて流さな  
166: いだよ」  
167:  
168:  
169: □1516年。旅立ちの日の多分、ちょっと前。  
170: ・迷夢登場。だけれど、微妙におかしい。……子ども？  
171:  
172: 迷夢「……み・み・な・が・て・い……ここか……」  
173: 迷夢「ったく、ど～して、場所を覚えてくれないのよ、くそチビめっ！ ——ついでに、迷夢と  
174: あるうあたしがどうして、こんな様なのよっ！ 折角、復活できたと思ったのに。いつま  
175: で経っても子供の大きさのままだし、魔力も最大マックスまで回復できないなんて……！  
176: あ～もう、何でなのよ」  
177:  
178: SE：耳長亭のドアをノック。  
179: SE：ドアが開く。  
180:  
181: ジーゼ「——どなた？」  
182: 迷夢「キミがジーゼ？」  
183: クリルカ「ねえ、ジーゼ。誰か来たの？ お客さん。それとも、ただの冷やかかし？」  
184: ジーゼ「クリルカ、ええ、お客さんよ。……ちょっと、シリアくんを呼んできてください」

185: クリルカ「うん、判った」（ちょっと、深刻そうに  
186:  
187: SE：足音。  
188:  
189: 迷夢「ねえ、あたしが誰なのか聞かなくてもいいの？」  
190: ジーゼ「お客さまのお名前を聞いたりはしませんよ」  
191: 迷夢「あれえ？ リボンちゃんから聞いてないの？ おかしいなあ。 あっ！ それとも、エル  
192: フの子猫ちゃんその二から聞いてない？」  
193: ジーゼ「……エルフの子猫ちゃんその二って誰ですか？」  
194: 迷夢「金髪碧眼の女の子。え〜と、名前はあ、何だっけ？ ……あ、そう、セレスちゃん」  
195: ジーゼ「特に聞いていませんけど……？」  
196: 迷夢「なに！ 何でよ。万一を考えて最低でもセレスが戻った頃合いを見計らったつもりなの  
197: に。でないと、あたしのこと説明してくれるの誰もいないじゃん！ そんなの困るっ！  
198: ——じゃあ、リボンちゃんを呼んできて。直接会えば、絶対に判るはず」  
199: ジーゼ「今、クリルカが呼びに行ってますから、もうすぐ戻って来るはずですよ」  
200: 迷夢「もうすぐっていつよ？ もう、イヤってほど待ったんだから、一秒だって待てない！ 早  
201: く連れてきてよ！」  
202:  
203: SE：いきなりドアが開く。ドアが迷夢とぶつかる  
204:  
205: セレス「ねえ、ジーゼ、ジーゼいる？」  
206: 迷夢「いったいなあ、もうっ！ あっ！ セレスっ！ 来たわね。あたしのことを説明してない  
207: なんて、どういうことよ！」  
208: セレス「——あら、……誰？」  
209: 迷夢「……目が笑ってるよ。判ってて言ってるんでしょ、キミの場合は」  
210: セレス「ううん。ジーゼも知ってるよ」  
211: 迷夢「何っ！ 知ってるなら、最初から言ってよ！」  
212: ジーゼ「でも、少しからかってあげたら、喜ぶからって、セレスが……」  
213: 迷夢「こっちは消耗して、ひーひー言ってるのにあたしで遊ばないでっ」  
214: セレス「……この間、遊ばれたお返しよ」  
215: 迷夢「何だと、このっ！ あ〜、こんなつまらないことで、消耗してる場合じゃないのよ。も〜、  
216: 回復しきれなくて、ここんとこずっとお子ちゃまサイズでやりきれないんだからっ」  
217: セレス「そうだと思ってるなら、少しは大人しくしてたらいいじゃない。時間、あまり、残って  
218: ないんだから。デュシが戻ってくるまでに出来るだけ体制を整えておかないと……。あの  
219: 娘、癩癩持ちだから、やれと言われたことはやっとかないと、あとが怖い」  
220: 迷夢「あら？」  
221:  
222: SE：足音いっぱい。  
223:  
224: ジーゼ「来ましたよ」  
225: 迷夢「あっ、ハロ〜、リボンちゃん」  
226: シリア「……誰？ マリスじゃないのか？」  
227: 迷夢「誰って、そんなあ。あたしのことを忘れちゃったの？ お前は必ず戻れ、お前はこんなと  
228: ころでは死なないって言ってくれたのは……あれ？ サスケだったっけ？」  
229: シリア「……？」  
230: 迷夢「……。あ〜。あたしは迷夢なんだけど……」

231: シリア「な？ 迷夢？ おま……迷夢？？ そ、その姿はどうした？ と言うか、どうしてここ  
232: に居る？ あの時、レイヴンにやられて？ 巻き添えにして死んだじゃなかったか？ 確  
233: か、いや、絶対そうだ」  
234: 迷夢「……ん〜？ あ、そっか。キミとあたしはまだ会っていないんだものね？ あっちのリボ  
235: ンちゃんはこっちのリボンちゃんの将来なのかな？」  
236: シリア「何、訳の判らないことを言ってるんだ？ お前」  
237: 迷夢「こっこのこと、気にしないで。それよりさ、折角、久しぶりに会ったんだからマリスが来  
238: るまでちょおっただけ、お話ししない？ まだ、それくらいの余裕はあるわよねえ？」  
239: ウィズ「と言うか、お前、何だ？」  
240: 迷夢「——何だって言われてもねえ……。説明するのに一週間はかかるわよ」  
241: セレス「手短かに言ってあげたら？」  
242: 迷夢「そんなお気軽に言ってくれるけどさあ？ キミだって当事者の一人じゃん？」  
243: セレス「そうだけど、キミほど長く関わってるワケじゃないから」  
244: 迷夢「……ま、面倒くさいってコトよ」  
245: ウィズ「それで納得すると思うのか？」  
246: シリア「そう言えば、セレス。帰ってきてたのか？」  
247: セレス「うん、帰ってきてたよ。本当は一週間前くらいに戻ってきたんだけど、やることだけや  
248: って、あとはじっと大人しくしてた。あはははっ、ね、ジーゼ」  
249: ジーゼ「そうですね」  
250: シリア「二人でぐるだったってコトか……」  
251: セレス「そうよ。何か文句あるの？ ……だって、しゃあないじゃん。他に頼れる人がいなかっ  
252: たんだもの。母さんのこともあったし、封印の絵もどうにかしなくちゃならなかったし  
253: ……。とにかく、フツ〜では考えられないくらいに大変だったの」  
254: シリア「大変ね……。それにしても良かった……。黒い翼のお姉さんがマリスじゃなくて……」  
255: ウィズ「——なあ、こいつはあれか。マリスとは関係ないのか？」  
256: 迷夢「と言うか、キミ、誰？ さっきからうるさいんだけど」  
257: ウィズ「だ、誰って。エスメラルダ期成同盟のウィズだ」  
258: 迷夢「知らない」  
259: ウィズ「知らないってなあ、人に尋ねておいてその態度はないだろう」  
260: 迷夢「あははっ！ 気にしない、気にしない」  
261: ウィズ「……セレスが二人いるみたいだ」  
262: 迷夢「言っとくけど、セレスとあたしを一緒にしないでよね。格が違うのよ」  
263: セレス「それはあたしの台詞よ。こんな性格ブスと同列に扱われたらたまらないのよ」  
264: 迷夢「何ですって？」  
265: セレス「何よ。文句ある？」  
266: シリア「——デュシは？」  
267: セレス「あたしと一緒に戻ってこなかったの。キミと迷夢と一緒にマリスをぶっ潰すんだって  
268: 息巻いて行っちゃったよ。でも、きっと、もうすぐ帰ってくるから。あたしは信じてる  
269: ……」  
270: シリア「そうか、二手に分かれて帰ってくるとは思わなかったな」  
271: 迷夢「二手でも三手でもいいけどさ。何か食べるものない？」  
272: ウィズ「……何なんだ、あれ？」  
273: シリア「昔から、ああいうやつなんだよ。理解しようとするだけ無駄だ」  
274: 迷夢「あら、酷いんじゃない。それは。あたしとリボンちゃんの仲なのに」  
275: シリア「そんなこと言われてもな。親交を温めたのはオレじゃないんじゃないのか？ オレとお  
276: 前は千年以上も昔にアルケミスタの洞窟で会ったきりだ。オレはまだまだガキで、ホンの

277: 短い間だった。他の誰かと勘違いしてるんじゃないのか？」  
278: 迷夢「あ〜。やっぱり、そういう風になっちゃうのかあ、残念！」  
279: シリア「残念でも何でもないだろ。フツウの関係で十分だ」  
280: 迷夢「そおかしら。あたしとしてはキミとは特別の関係に……って、……キミはエルフの子猫ちゃんなのよ」  
281: シリア「誰か抱き枕ちゃんなんだよ」  
282: ジーゼ「……しっ、静かに……」  
284: SE：緊張を現す音。  
285: ジーゼ「大きな力を感じる」  
286: シリア「——ジーゼ、何を感じた……？」  
289: マリス「——シメオンに会い！ それとも、わたしがそちらに出向いた方がいいか？ 貴様らの大事な森を蹂躪されたくなければシメオンに来るがいい」  
291: シリア「マリス……。とうとう来たか……。しかし……何故、ここに来ようとしらない。目的ものはここにあるのに」  
292: 迷夢「マリスなりの配慮じゃないかしら。マリスはああ見えて心は広いのよ。エルフの森を犠牲にしなくても済むように考えてくれてる……訳ないわ。何か罫を仕掛けようと思ってるはず。一度ならずも二度までもやられて、策なしのマリスだとは思えない」  
293: ウィズ「行くべきじゃないと俺は思う。最初から、こっちの有利に運ぶには……」  
294: シリア「そう言う訳にはいかないのさ。デュレはシメオンに帰ってくる」  
295: ウィズ「何にしても、マリスがデュレを見つける前に俺たちがデュレを確保しなくてはならないんだな。なら、急いで行動に移った方がいい。こうしてる間にデュレが帰ってきたら、即アウトだろ？」  
296: シリア「縁起でもない。……マリスが相手ではシャレにならない」  
297: マリス『貴様らはわたしの前にひれ伏し、土に還れ。わたしは負けない！』  
298: シリア「……迷夢……。お前なら知っていそうな気がする。1292年で何があった？」  
299: 迷夢「……一言で言えば、マリスを地下墓地台回廊に封印したってことになるのかしら？」  
300: シリア「……地下墓地台回廊か……。満天のお星さまのものが希望だったんだけどな。……が、どちらにしても、マリスの封印は解けてしまったと言うことか——」  
301: 迷夢「そんなことグチャグチャ言っても始まらないでしょ。与えられた状況で最大限の力を発揮する。それしかないでしょ。このあたし、策士・迷夢がステキな作戦を伝授してあげるわ」  
302: SE：なでなで  
303: シリア「——俺の美しい毛並みが絡まるだろ」  
304: 迷夢「後で櫛とかしてあげるからいいじゃない」  
305: シリア「ちっとも良くないぞ」  
306: ジーゼ「じゃれてる場合じゃないでしょう？」  
307: シリア「ああ、そうだった。対策を立てないとな……」  
308: ジーゼ「さあ、どうします？」  
309: シリア「どっちにしても、選択は二つに一つ。迎え撃つか、こちらから出向くか……。だろ？」

320: 迷夢「そして、時間短縮、被害を最小にとどめるためには出向くしかないわ」  
321: セレス「あまり気は進まないんだけどなあ」  
322: 迷夢「うるさいのよ、キミは。作戦会議中は作戦のこと以外は発言しないでちょうだい」  
323: セレス「は〜はい。思う存分、会議でも何でもしてちょうだい。あたし、寝る」  
324: シリア「迷夢の言うとおりだろう。予定通りならばデュレは封印を解く魔法を手に入れて帰ってくる。——まだ、帰ってこない可能性も否定しきれないが——」  
325: ウィズ「だが、信じて待つしかないんだろ？」  
326: シリア「そうだ。それまでの間にオレたちは対マリス戦に備える。どっちにしろ決定打は久須那になるだろう。封印の絵を持って。……ウィズ、セレス、迷夢、オレの四人で行く」  
327: ウィズ「で、その大きな絵をどうやってシメオンまで運ぶつもりだい？」  
328: セレス「あ〜、こうなるなら、シメオンから運び出そうなんて思わなければ良かったね、それ」  
329: 迷夢「あたしがいることを忘れてない？ シメオンなんて、パーミネイトトランスファーで一っ飛び。時間短縮、経費節減。デュレのフォワードスベルと比べても遜色なし。と言うか、あたしの方が上手いに決まってるんだから、安心して任せてちょうだい」  
330: ウィズ「……自分で言っておいて何だが、鴨が葱を背負ってくるようなもんだな」  
331: 迷夢「その辺は大丈夫」  
332: ウィズ「何がどう大丈夫なのか気になるが……。それで、久須那封印の絵を持って、オレたち四人でシメオンに乗り込むとして、勝算はどれくらいあるんだ？」  
333: セレス「——ないのよ。はっきり言って。……奇跡が起きても勝てっこない」  
334: ウィズ「ない？」  
335: セレス「ない。ゼロに等しい。ウィズ。キミは天使の戦いを知らない」  
336: ウィズ「天使なら知ってるさ、トリリアンも天使を擁している。俺たちはその為久須那を……」  
337: セレス「捜そうとしていたんでしょ？ それは知ってる。でも、キミは天使がどれほどの魔力をもっていて、それを行使するとどうなるかなんて何も知らない！」  
338: 迷夢「ま、街一つ軽く消し飛ばすでしょうね。それに手加減はしてくれないだろうし、二度とはね」  
339: セレス「あ、あれで手加減してたの？」  
340: 迷夢「そお。マリスが本気だったら、時計塔ごとキミたちを吹き飛ばしたはずよ。けれど、しなかった。つまり、マリスには未練か何かがあるのよ……。ま、久須那なんだろうけどさ。シルエットスキルじゃなくて、本物と決着をつけたいんでしょよ」  
341: シリア「だが、本物は封印を解いたら、マリスの呪詛が進行するんだ。一週間しかない」  
342: 迷夢「マリスに呪詛を解除してもらうか、呪術の専門家、そうねえ、退魔師を連れてくるしかないわね。久須那がちらっと言ってたんだけど、東方の退魔師・申（しん）だったかな。何か、そんなような人の名を言っていたような気がするのよねえ。それはいいんだけどさ」  
343: ウィズ「人探しはジーゼのドライアドネットワークを頼ってみたらどうだい」  
344: ジーゼ「申……」  
345: シリア「ジーゼ……。具合でも悪いのか」  
346: ジーゼ「うらん。大丈夫。その、退魔師、捜してみるわね」  
347: シリア「頼むよ。……これで全ての案件に答えを出せたのか？」  
348: セレス「多分ねえ。それだけだと思うけど」  
349: 迷夢「そいじゃ、行きますか。ホラ、時は金なり。寸刻を惜しんで始めないと、始める前に負けちゃうわよ。……あらあ？ 何、みんなで辛気くさい顔しちゃうってさあ。ほら、早く。みんな、絵の前に集まって、まとめて行っちゃいませよ？ パーミネイトトランスファー！」  
350: SE：魔法の実行する音。  
351: 368:

369: 迷夢「……あ」  
370: セレス「……？ どしたの、迷夢？」  
371: 迷夢「——ところで、あのさ、シメオンのどこに行けば良かったんだろうね？」  
372: セレス「！ ちょっと、待って。出口をどこか考えないで魔法を使ったの？」  
373: 迷夢「待ってって言われても、もう、待てないだけだね」  
374: セレス「そんなぁ。ダメ、あたし、降りる。空間転移系の魔法はいやなのよお。デュレに実験台  
375: にされてたし。それなのに、行き先不明だなんて信じられない」  
376: ウィズ「何事も諦めが肝心だ。命まで取られることはないだろう？ 今のところ」  
377: 迷夢「あら？ 判らないわよ。あたしは迷夢なんだから」  
378:  
379:  
380: □シメオンの町で、デュレ。  
381: ・デュレ、時間移動を終えて、シメオンの町を走っている。  
382: SE：デュレ、走ったり、歩いたり。  
383:  
384: デュレ「……どうしたら、ここの年代を確かめられるか……」  
385: デュレ「町外れの発掘キャンプを探す……。あれなら、二週間しか設置されていないし、なかっ  
386: たとしても新しいキャンプ跡が残っていたら、時期を特定出来るはず……。あとはサムは  
387: どうなったかしら……？」  
388: デュレ「ああ……。ちゃっきーがいたら、サムなんかすぐに見つけられそうなのに」  
389: ちゃっきー「呼ばれて飛び出て、ジャジャジャジャーン。今、呼んだ？ 呼んだでしょ」  
390:  
391: SE：ちゃっきー出現！  
392:  
393: デュレ「よ、呼んでません。あなたのことなんか、微塵も考えていないんですから」  
394: ちゃっきー「ウソ～！ ぜってえ考えたね。おいらに見抜けねえウソはねえ。デュレっちは絶対  
395: 確実においらを心の奥底で召喚しようとしたじえ？ しかも、しかも、サムっち捜しに使  
396: おうとしたらうさ。おいらは人に使われるのがでえっきれえにゃのだ。風の吹くまま、  
397: 気のままにしかおいらは動かねえのだ。サムっちなんか知ったこっちゃんいもんね」  
398: デュレ「静かにしなさい。それより、サムを見つけて欲しいんです」  
399: ちゃっきー「ほ～ら、やっぱり。けれどお……、え～っ！ 男を追い求めても面白くないんだも  
400: へん。けどお——」  
401: デュレ「け、けど。何ですか？」  
402: ちゃっきー「か～い～デュレっちのお願いだったら、場合によっちゃあ、きいてやらねえことも  
403: ねえぜ。ふっふ～、おいらと熱いキスをぶちゅっと……！」  
404: デュレ「却下します！ ——イヤなら、キスの代わりに熱～いダークフレイムをお見舞いしてあ  
405: げましょうか？」  
406: ちゃっきー「ぐお？ しゃ～ねえなぁ。今度だけよお、おいらの無償特別奉仕！」  
407: デュレ「では、サムのご事は任せて大丈夫ですね。見つけたら……」  
408: ちゃっきー「おうよ。デュレっちのとこへ連れて行けばいいんだろ？ なぁに心配はいらねえさ。  
409: おいらには超高性能陰険女……。もとい、クールな美女探知機をも搭載しておるのだ。ご  
410: 安心召されい！」  
411: デュレ「あなたについていきます……」  
412: ちゃっきー「はいじゃ、デュレっち。チミはおいらの後をひたすらついてくるのだ。サムっちの  
413: ところまで導いてしんげよう」  
414:

415: SE：足音。  
416:  
417: ちゃっきー「毒電波受信装置、感度マックスに設定。例え瀕死であろうとも、絶対必ず見つけ出  
418: すのコトよ～。むっ！ 微弱電波受信！ こおの特徴的な波形はぁ！ まず、間違いない  
419: え！ その発信源はぁ～。おる？ 地下……でえか、とっても浅い地中？」  
420:  
421: SE：じたばた。  
422:  
423: デュレ「あ、あれは何？」  
424: ちゃっきー「ありゃあ、サムっちの旦那の足だと思っねえ。まあ、行ってみようじええ」  
425: デュレ「……。ホントにサムの足？」  
426: ちゃっきー「おう、間違がいねえなぁ！ おいらの記憶力をなめちゃあいけねえな。このお靴の  
427: 色、形状。全てにおいてサムっちのものに間違いねえ！」  
428: サム「……ひでえ……。ちっきしょう！ デュレめ、俺さまをこんな目に遭わせておいて覚えて  
429: おけよっ！」  
430: ちゃっきー「Hey you!! てめえはこんなところに頭と胴体、突っ込んで何やってんだい？ 新  
431: ・頭隠して尻隠さず。実は実はこお～んな廃墟で幽霊、亡霊相手にかくれんぼでも始めた  
432: のかにやあ？」  
433: サム「……？」  
434: ちゃっきー「およよ？ おいらのことが判らねえのかあ？ 神出鬼没。幾多の時を股にかけ、時  
435: の果てから地獄の底まで、どこからだって馳せ参じるおいらのことを忘れたあとは言わさ  
436: ねえぜえ？」  
437: サム「てめ、もしかして、ちゃっきーか？ てめえは一体、幾つまで生きてりゃ気が済むんだ？」  
438: ちゃっきー「ちゃっきー、判んな～い♪」  
439: サム「あのな……。それより、ここから出してくれ！」  
440: ちゃっきー「よっっ！ デュレっち。てめえの出番だじえ！ 遠慮なく、破壊の限りを尽くすの  
441: じゃ」  
442:  
443: SE：デュレ、ちゃっきーを吹っ飛ばす  
444: SE：闇護符をポッケから取り出す音。と、発動。  
445:  
446: デュレ「——キャリーアウトっ！」  
447: サム「どわっ！」  
448:  
449: SE：ドスン。  
450:  
451: サム「……もう少し、丁寧にできねえのかよ、てめえは！ って、デュレか」  
452: デュレ「助けてもらえただけでも有り難いと思ってください。……ところで、さっき、わたしに  
453: 覚えておけとか何とか言っていたみたいですけど、あれはどういう意味ですか？」  
454: サム「い？ 俺、何か言ったかな？ 記憶に何も残ってないんだけど……？」  
455: デュレ「……どこそ政治家みたいな間抜けなことを言うんじゃない！」  
456: サム「ははっ！ 通用するとは思っちゃいないさ。悪かったよ。俺をここに連れてきてくれた礼  
457: はする。ありがとよ。てめえのお陰でまた、久須那と話せる。——けどよ、気がつきゃ、  
458: 瓦礫の下敷きだっただ。悪態の一つや二つつきたくなるだろ？ フツー？」  
459: デュレ「否定はしませんよ。ですが、久須那さんのことで礼を言うのは気が早すぎると思います。  
460: 封印を解くか、壊すかどうかをしないでほなりませんし、それも成功する保証もありま

461: せん」  
462: サム「心配するな、こう言っちゃてめえに悪いが、過大な期待はしてねえよ……」  
463: デュレ「——それでいいんです。あと、その成功率を少しでも上げるには闇の精霊と契約する他、  
464: 道はありません」  
465: サム「——あいつか。てめえ、確かあいつにシルトってえ名前つけてたよな。……あれだけの揺  
466: れと倒壊を喰らって、あのデリケートな精霊核が無事だと思うか。そして、精霊が生まれ  
467: るまでに成長していると思うか？」  
468: デュレ「例え、あなたの言う通りだったとしても、それに賭ける他ありません。それに闇の精霊  
469: ・シェイドと契約してみると言い出したのはあなたですよ？」  
470: サム「へへ、そうだったな。二百二十四年か、無事でいるといいな」  
471: デュレ「……そのことなんですけど。あなたは今日の日付が判るんですか？」  
472: サム「——俺はてめえの言葉を信じただけだ。もし、ここがてめえの時代でねえなら、判らん。  
473: そうだなあ、手取り早く行けば、あれだ。ちゃっきーに訊いてみ。あれは1292年から  
474: 連れてきたんじゃないだろ。だったら、知ってるはずだ」  
475: デュレ「あの、ちゃっきーは捨ててしまったんですけど……」  
476: サム「心配なんかいらねえよ。どうせすぐ来る。あれはそういうやつだ」  
477: ちゃっきー「こらっ！ デュレっち。パートナーたるこの俺さまをぶん投げるたあい度胸だ」  
478:  
479: SE：サム、ちゃっきーを握る。  
480:  
481: サム「……今日の日付は？ ちゃっきー。答えねえと頭から……焦がすか」  
482: ちゃっきー「ん～？ サムっちもとうとうボケちまったか。その若さで前後不覚にワケが判らね  
483: えとなると、介護する久須那っちが哀れで……。わー！ 本気にしないでくださいまし！  
484: 今年は1516年でさあ、旦那」  
485: サム「だとよ。じゃ、あとは精霊核が壊れてないことを信じて祈るしかないな」  
486: デュレ「そう信じるしかありません。もし、精霊核が壊れていたり、シルトが存在していなかっ  
487: たら、今までわたしたちのしてきたことの全てが水の泡になってしまいます」  
488: サム「それも随分と大げさな話だな。大丈夫、水の泡にはなりやしねえよ。てめえにとっちゃあ、  
489: 契約の相手としてシェイドがベストなのは言うまでもねえことだが、精霊はシェイドだけ  
490: じゃねえんだ。ジーゼだっているんだぜ？」  
491: デュレ「そうですけど……」  
492: サム「けど、まずはその前に俺の家の地下室だ。ワイン用の貯蔵庫としてそれなりに頑丈に出来  
493: てるからな。あそこが潰れてるってことはねえと思うが……。精霊核がどうなってるかだ  
494: けは実際に確認してみなけりゃ判らねえな。——行くぜ、デュレ」  
495: デュレ「あの——、場所は判るんですか？」  
496: サム「判るさ。見てくれは派手に変わっちゃまったといえ、ここは俺の街だからな」  
497:  
498:  
499: □空間転移をして、セレスたちはシメオンに……。  
500: SE：ドタン。  
501:  
502: セレス「……！ ——あいつあ……。もう、どうして、いつまでもともに出られないのかなあ！  
503: 雑なのよ、雑！ 何とかして欲しいわ、全く」  
504: 迷夢「生きて着いたんだから、いいじゃない。って言うか、ここどこ？」  
505: セレス「そりゃ、あたしの台詞だい！」  
506: ウィズ「……大聖堂前の目抜き通りだろうな……」

507: セレス「で、これからどうする作戦なワケ？ デュレを捜す？ 絵を隠す？ まさか、行き当た  
508: りばったりだとか言うつもりじゃないでしょうね？ 迷夢！」  
509: 迷夢「それもいいかなあ～とは思ったんだけどねえ？ やる時はやるのよ。キミと違って」  
510: セレス「何だとお？」  
511: シリア「——どうして、こいつらはこう、無駄なところにエネルギーを使うんだ？」  
512: 迷夢「どこが無駄だっていうのよ。過度のストレスはこう言う時にでも発散しないと……ね？」  
513: セレス「……あら？ あたしも今、同じコトを考えてた」  
514: シリア「——まあ、いい。仲良きことは美しきことかな……。はあ……」  
515: 迷夢「で、肝心のマリスちゃんはどこにいるのかなあ？」  
516: シリア「知らん。だが、わざわざ捜さなくてもマリスからお出ましねがえるさ。あいつの目的は  
517: 恐らく久須那なんだ。封印の絵がここに戻ってきた以上、すぐに現れるか……。でなければ  
518: ば、封印が解かれた後にでも現れる寸法のだろうさ」  
519: 迷夢「——ところで、地下墓地大回廊跡地にマリスの何かは残ってないの？」  
520: シリア「何も感じられない。お前もそうだろ？ 判ってたら、訊くはずがない」  
521: 迷夢「ま・ね。……そうか、マリスは逃げおおせたんだ。折角、頑張ったのにね、リボンちゃん。  
522: たったの二百二十四年だって。切ないねえ……」  
523: シリア「本心がスケスケだ。もっと、演技力を磨いた方がいいぞ」  
524: 迷夢「ありゃりゃ？」  
525: シリア「未来を見透かす不死鳥の卵の巨大な魔力放射で封魔結界が弱まってしまっのか——」  
526: ウィズ「何にしても、一度止まった歯車が再び動き出したのさ。そうだろ、シリア」  
527: シリア「そうだな、ウィズ。さてと……」  
528: ウィズ「ちょっと待て、向こうから、誰かが走って来る」  
529:  
530: SE：誰かが近づいてくる音。  
531:  
532: デュレ「……！ セレスっ！ わたしは間に合いましたか……？」  
533: セレス「そうね。間に合っちゃったみたいよ」  
534: デュレ「何ですか、それは？ まるでわたしに帰ってきて欲しくなかったみたいですね」  
535: セレス「ううん、そんなことはありませんのことよ」  
536: デュレ「ウソつき。——でも、わたしはそんなあなたが大好きです♪ また、会えて良かった」  
537:  
538: SE：デュレ、セレスに抱きつく。  
539:  
540: セレス「い？ あ、あの、さ？ キミがそんな調子だとやりにくいよね。もっと、こう、いつ  
541: ものように高飛車なデュレでいてくれる？」  
542: デュレ「何ですって？」  
543: サム「よーよー、てめえらよお。今は抱き合ったり、再会を祝ったり、悠長にしている場合じゃね  
544: えんじゃねえのか？ デュレよ。さっきは時間に間に合ったとか、そうでねえとか散々騒  
545: いでたじゃねえか」  
546: セレス「サム……！ どうして、キミがここに？」  
547: サム「俺に訊くより、デュレに訊いてみるよ。正確な答えが返ってくるぜ？」  
548: セレス「じゃあ、デュレ？」  
549: デュレ「そんなことより、急ぎましょう、セレス。早く見つけないと手遅れになってしまいます」  
550: セレス「手遅れになるって……ってのは判るけど、何を見つけない……？」  
551: デュレ「忘れたとは言わせません。とにかく、行きます」  
552:

553: SE：デュレ、セレスの手首を掴んで、ずんずん歩く。  
554:  
555: セレス「え？ 行くなってどこへさ」  
556: デュレ「決まっています。闇の精霊を捜しにです。ドローイングを解くにしても破るにしても大きな魔力が必要です。——それを身をもって体験しましたから、今度は必ず成功させます。  
557: 成功しない訳にはいかないんです。マリスが来たからお終いですから、それまでに何とかし  
558: ないと」  
559: セレス「闇の精霊ってあれ？ あの、サムんちの地下室に巣くってた」  
560: デュレ「そうです。……セレス、ここはみんなに任せて、わたしたちは行きますよ」  
561: シリア「ところで、デュレ。場所は判っているのか？」  
562: デュレ「大丈夫です。ここに来るまでの間に位置の見当はつけましたから」  
563: セレス「どうやって？ ここは瓦礫の山。あちは一応、綺麗な街並みだったじゃない？ こん  
564: なのにも様相が変わってるのにそれでもサムんちが判るの？」  
565: デュレ「心配する必要はありません。絶対に大丈夫」  
566: セレス「まあ、そんなこと言っちゃって。ホントは何も判らないいでしょ？」  
567: デュレ「きちんとサムと相談、打ち合わせはしてあります。あなたと違って抜かりはありません」  
568: セレス「あ〜。他意はないんだよ。ただ、何となく、そ〜かな〜って……」  
569: デュレ「本当は何も判ってないのはセレスでしょ」  
570: セレス「——あい、そーでした。わるーござんしたね」  
571: デュレ「もう！ ごちゃごちゃ言っていないで行きますよ。あととここを真っ直ぐ行くだけなんです。だから、もう、迷いようがないんです。もし迷ったら、セレス以下です」  
572: セレス「あの〜。幾らなんでもそれは酷すぎるんでない？」  
573: デュレ「と言いますか、何であなたはシルトの場所を知らないんですかっ！ 時間があれば探して  
574: おいてとあれほど言ったのに。人の言うことなんて全然きかないんだから……！」  
575: セレス「あたしにもそれなりに事情というものが……」  
576: デュレ「却下です！ それよりも、早く」  
577: セレス「あの〜？ も、ちょっと優しくしてくれないかなあ。久々でこれはきついわあ」  
578: デュレ「ゴタゴタ言わない」  
579: 久須那「相変わらず、元気そうで何よりだな」  
580: 迷夢「あら、久須那。お久しぶり。色々大変だったけど、元気してたあ？」  
581: 久須那「まあ、こうして姿を現せるぐらいにはな。お前は——あ〜」  
582: 迷夢「まあ、こんな有様だけど。一応、生き残っちゃったみたいなのよね」  
583: サム「久須那っ！ ……の、シルエットスキルか」  
584: 久須那「がっかりするな。もうすぐ、オリジナルと会える」  
585: サム「ああ、きっと、もうすぐだ。だが、てめえはそれでいいのか？ 封印が解けたら、マリ  
586: の呪詛が進行するんじゃないか？ 解呪の方法は見付かったのか？」  
587: 久須那「大丈夫。ジーゼが退魔師を捜してくれてる」  
588: サム「そうか……。ところで、一度、訊こうと思っていたんだが、マリスを召喚したのは誰だ？」  
589: 久須那「……レルシアさま」  
590: サム「——やっぱり、あいつか。何だか、いつまで経ってもお転婆娘に振り回されてるって気分  
591: だな。……だが、レルシアならてめえの封印を解くための何か解決策を用意してると思う  
592: んだかな。どうだい？ 久須那」  
593: 久須那「判らない。わたしに訊くより、リボンちゃんに訊いたらどうだ？」  
594: シリア「さあな。……オレにはっきり言えるのは封印を解くのは今だとすることだけだ。レルシ  
595: アが亡くなる前までに何かを用意していたかどうかは判らないよ。レルシアはオレにこの  
596: 絵を託し、テレネンセスの教会跡にメッセージを残し、久須那に選ばせると言っていただ  
597:  
598:

599: けだ」  
600: サム「その選んだ連中ってのがデュレとセレスの凸凹コンビのワケか……」  
601: 久須那「た、頼りなかったか？」  
602: サム「うんにゃ。てめえを何とかしたいと思う情熱にかけちゃあ、誰にも負けねえだろうな」  
603: 迷夢「そお〜んなもんかしらねえ？ あたしの見立てじゃあ、ただの成り行きだね、あれは」  
604: サム「ああ？ てめえだって、久須那のためじゃなかったのか？」  
605: 迷夢「うん。あたしはあたしのためだけよ。あたしの目的を果たすのにたまたま丁度よかった  
606: から、一緒にいただけ」  
607: サム「あ？」  
608: シリア「ま、細かいことは気にするな。迷夢は昔からこういうやつなんだ。けど、同じ方向を向  
609: いている間は頼もしい味方でいてくれる——。……さて、新しい面子も加わったことだし、  
610: デュレたちが戻ってくるまでか、マリスが痺れを切らす前までに本格的な作戦会議といき  
611: ますか。何としても、この戦いを最後の戦いにする。もう、“次”は必要ないっ！」